

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室 耳科学分野専門教授就任のご挨拶

大阪医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室 耳科学分野専門教授 萩森 伸一

平成29年6月1日付けで耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室、耳科学分野専門教授に就任いたしました。

私は平成元年に本学を卒業し、母校耳鼻咽喉科学教室に入局いたしました。そして平成7年に耳鼻咽喉科専門医の資格を取得して以降は一貫して難聴やめまいなど耳科学の診療・教育および研究に関わってまいりました。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学は耳鼻咽喉科学と頭頸部外科学との2つに大別されます。さらに耳鼻咽喉科学は耳科学、鼻科学、口腔・咽頭科学、喉頭科学に細分され、これらは聴覚や平衡覚、嗅覚、味覚、嚥下などの感覚器の疾患を扱う感覚器学と言い換えることができます。その最終アウトカムは患者QOLの改善です。他方、頭頸部外科学は良性腫瘍や悪性腫瘍を扱う腫瘍学であり、患者の生命予後の向上をアウトカムとしています。

近年の急速な高齢化に伴い、耳の疾患構造は大きく変化してまいりました。子供の急性中耳炎は減少した一方、加齢に伴う難聴やめまいの患者が急増しております。厚生労働省の国民生活基礎調査では、「聞こえにくい」という訴えは高齢者では「腰痛」、「もの忘れをする」に次いで多く、実に高齢有症者の3人に1人が難聴を自覚しています。また「ふらつき」や「めまい」、「耳鳴」も高齢者に多い症状で、超高齢社会において耳鼻咽喉科医が果たすべき役割は大きいものがあります。今後高齢化が更に進み、人口構成では80歳代が最多となる15年

後、難聴患者の更なる増加は疑う余地がありません。難聴と言えば補聴器が真っ先に頭に浮かびますが、「雑音ばかりで役にたたない」、「音が大きくなるばかりで会話の内容が聞き取れない」など補聴器に対する不満をよく耳にしますし、このような先入観から補聴器のフィッティングを希望しない患者が少なからず存在することはとても残念に思います。補聴器は完全な製品ではありませんが、正しい知識と装用、そしてリハビリテーションでコミュニケーションが再び可能になり、生活の質が飛躍的に向上します。補聴器装用の正しい啓蒙と実践が、超高齢社会が到来した今の最優先課題と考えています。

めまいについては、良性発作性頭位めまい(BPPV)が増加しています。BPPVは内耳の耳石器異常で生ずるめまいですが、日常生活で頭位を変換する機会の少ない人に発症しやすい特徴があり、活動力の低下した高齢者に多くみられます。特に入院でベッドでの安静が続いた人は、安静解除の直後から激しい回転性めまいに襲われることがあります。BPPVの予防には、日頃から積極的に頭位を変換することがとても有効です。私たちはこれを「めまい体操」と呼んでいます。ある病院で高齢者の術後患者を対象に、この「めまい体操」をルーチンとして取り入れた結果、BPPVで耳鼻咽喉科を受診する患者が大きく減少した経験があります。“転ばぬ先の杖”である「めまい体操」の重要性を、社会に広めてまいりたいと思います。

一方、小児の難聴には先天性難聴やムンプス難聴があります。出生1000人あたり1人が先天性難聴となることが分かっています。先天性難聴はその後の言語発達や学習に大きく影響しますが、早期発見し補聴器や人工内耳の装用、そしてリハビリテーションによってその影響度合いを小さくすることが可能です。また難聴の遺伝子検査は健康保険に収載されており、遺伝子変異をもつ子供が今後どのような聴力経過を辿るのかについても予測可能になってまいりました。本学附属病院ではこの4月から出生児全員に対する聴覚スクリーニング検査を開始いたしました。また当科では従来からの幼児難聴外来に加え、遺伝難聴外来を新たに開設いたしました。少子化問題がクローズアップされる今、社会の宝ともいえる子供を難聴から守り、また難聴児には適切な医療・療育を提供する役目が耳鼻咽喉科医にあります。産科・小児科の先生方とも連携をとりながら、小児の難聴の診療に積極的に取り組んでまいります。また後天性一側聾の大きな原因であるムンプス難聴は、ワクチン接種によって予防が可能です。ムンプス難聴例を診るたびに、なぜこの子はワクチンを接種しなかったのかと残念な気持ちになります。ムンプス難聴予防にはワクチン接種が有効であることを、改めて社会に啓蒙してまいりたいと考えています。

以上、就任にあたっての所感を述べさせていただきました。本学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学、とりわけ耳科学の発展、そして本学の更なる発展に寄与することに加え、耳科学を専

攻する医師として社会的責任を果たし、また次の世代の耳科医の育成に尽くしたいと思えます。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ致します。